

(様式3)

(調書)

2024 年度  
自己点検・評価書

2025 年 9 月

国際医療福祉大学成田薬学部

■薬学部（6年制学科）の正式名称と定員

国際医療福祉大学成田薬学部薬学科

入学定員（ 120 ）名、収容定員（ 720 ）名

■所在地

〒286-8686

千葉県成田市公津の杜 4-3

■薬学部以外の医療系学部がある場合、該当する学部の（ ）内に○を記入し、その右に学科の名称を記載してください。

医学部 （ ○ ）

歯学部 （      ）

看護学部 （ ○ ）

保健医療学部 （ ○ ）

その他 （ ○ ） 名称： 医療福祉学部

■大学の建学の精神および教育理念

建学の精神

国際医療福祉大学は、病める人も、障害を持つ人も、健常な人も、互いを認め合って暮らせる「共に生きる社会」の実現を建学の精神とし、その精神のもと、多彩な医療福祉専門職の育成とその地位向上を目指し、平成7（1995）年4月に「日本初の医療福祉の総合大学」として開学した。

この建学の精神「共に生きる社会」の実現は、生涯をとおして人権擁護に尽力した初代学長の大谷藤郎により提唱され、本学の医療福祉教育における各専門職の隔壁を外し、医療や福祉の専門職を目指す学生が同じキャンパスで共に学び、自らの専門に加え、常に自分の専門以外の幅広い知識や他人に対する優しい心を養うことが重要との考えのもと、開学から一貫して掲げてきたものである。

大学の基本理念

本学は、「人間中心の大学」、「社会に開かれた大学」、「国際性を目指した大学」という3つの基本理念と、この理念を実現するための7つの教育理念（人格形成、専門性、学際性、情報科学技術、国際性、自由な発想、新しい大学運営）を掲げ、病める人も、障害を持つ人も、健常な人も、互いを認め合って暮らせる「共に生きる社会」の実現を目指した教育を行う。

### 3つの基本理念

#### (1) 人間中心の大学

プロフェッショナルとしての専門的な知識や技能の修得にとどまらず、幅広くバランスの取れた良識ある人間を育成すること。

#### (2) 社会に開かれた大学

学問を創造的に追究するとともに、地域社会と一体となり、地域の医療福祉のニーズに応え、地域社会や医療福祉に関わる各界の人々の生涯教育の拠点としても機能できる大学となること。

#### (3) 国際性を目指した大学

国際的センスを備え、いかなる国の人々とも伸び伸びと協働できる真の国際人を育成すること。

### 7つの教育理念

#### (1) 人格形成

知識・技術のみに偏しない知・情・意を兼ね備えた人材を育み、「共に生きる社会」を目指していく。自ら考え、自ら行動する幅広くバランスの取れた人格の形成をはかる。

#### (2) 専門性

日進月歩する医療福祉の高度化・専門分化に対応した、学問の確立と研究の推進を行う。医療福祉のプロフェッショナルとしてふさわしい能力を学生生活で身につけていく。

#### (3) 学際性

医療福祉分野の大学の特性を生かして、他学科の専門科目も教養として修得し、授業外活動も重視する。総合的教養を併せ持つ医療福祉専門職を目指す。

#### (4) 情報科学技術

情報化社会の進展に対応できるよう、すべての学科において最新の知識・技術を修得させ、情報科学技術に強い医療・福祉専門職を育成する。

#### (5) 国際性

語学教育など一般教育だけでなく、専門教育や学生生活を通じて、人間（私人）としても専門家（公人）としても国際的視野を持った人材を育てる。

#### (6) 自由な発想

人間としての品位や、社会のルール・マナーの遵守を前提におきながら、学生個人の自由な発想や行動を歓迎し、特に宗教・思想・社会運動への関心や探究を尊重する。

#### (7) 新しい大学運営

時代の変化に即応して、大学の運営も年功序列を廃し、学生の立場から教員の評価もできるシステムを導入するなど、適時見直しを進め、自由闊達な校風の中で学生の自主性を育む努力をする。大学院教育については、特に生涯学習の視点に立って専門職育成のための教育、研究の充実を図る。

## 目 次

1	教育研究上の目的と三つの方針	1
	〔現状〕 . . . . .	1
	〔教育研究上の目的と三つの方針に対する点検・評価〕 . . . . .	4
	〔改善計画〕 . . . . .	5
2	内部質保証	6
	〔現状〕 . . . . .	6
	〔内部質保証に対する点検・評価〕 . . . . .	7
	〔改善計画〕 . . . . .	8
3	薬学教育カリキュラム	9
3－1	教育課程の編成	9
	〔現状〕 . . . . .	9
	〔教育課程の編成に対する点検・評価〕 . . . . .	10
	〔改善計画〕 . . . . .	10
3－2	教育課程の実施	11
	〔現状〕 . . . . .	11
	〔教育課程の実施に対する点検・評価〕 . . . . .	15
	〔改善計画〕 . . . . .	17
3－3	学修成果の評価	18
	〔現状〕 . . . . .	18
	〔学修成果の評価に対する点検・評価〕 . . . . .	18
	〔改善計画〕 . . . . .	19
4	学生の受入れ	20
	〔現状〕 . . . . .	20
	〔学生の受入れに対する点検・評価〕 . . . . .	21
	〔改善計画〕 . . . . .	22
5	教員組織・職員組織	23
	〔現状〕 . . . . .	23
	〔教員組織・職員組織に対する点検・評価〕 . . . . .	27
	〔改善計画〕 . . . . .	28
6	学生の支援	29
	〔現状〕 . . . . .	29
	〔学生の支援に対する点検・評価〕 . . . . .	30
	〔改善計画〕 . . . . .	30

7	施設・設備	31
	〔現状〕	31
	〔施設・設備に対する点検・評価〕	33
	〔改善計画〕	34
8	社会連携・社会貢献	35
	〔現状〕	35
	〔社会連携・社会貢献に対する点検・評価〕	35
	〔改善計画〕	36

## 1 教育研究上の目的と三つの方針

### 【基準 1-1】

薬学教育プログラムにおける教育研究上の目的が、大学又は学部の理念及び薬剤師養成教育として果たすべき使命を踏まえて設定され、公表されていること。

注釈：「薬学教育プログラム」とは、6年制におけるプログラムを指す。複数学科を持つ場合は、教育研究上の目的を学科ごとに定めること。

【観点 1-1-1】 教育研究上の目的が、医療を取り巻く環境、薬剤師に対する社会のニーズを反映したものとなっていること。

【観点 1-1-2】 教育研究上の目的が、学則等で規定され、教職員及び学生に周知が図られるとともに、ホームページ等で公表されていること。

### 【現状】

本学の理念並びに薬剤師養成教育に課せられた基本的使命を踏まえ、成田薬学部の実践教育研究上の目的は「学則」の第2節第2条第3項で規定し、薬学科の実践教育研究上の目的は「国際医療福祉大学教育研究上の目的を定める規程」の第5条に定めている。これら教育研究上の目的は、学生便覧にて公表され、教職員及び学生に周知されている。

### 【基準 1-2】

教育研究上の目的に基づき、三つの方針が一貫性・整合性のあるものとして策定され、公表されていること。

注釈：「三つの方針」とは、学校教育法施行規則第165条の2に規定されている「卒業の認定に関する方針」、「教育課程の編成及び実施に関する方針」及び「入学者の受入れに関する方針」を指す。なお、それぞれこれらの策定及び運用に関するガイドラインに記載されている「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー）、「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）及び「入学者受入れの方針」（アドミッション・ポリシー）と同じ意味内容を指すものである。

【観点 1-2-1】 卒業の認定に関する方針では、卒業までに学生が身につけるべき資質・能力が具体的に設定されていること。

注釈：「卒業までに学生が身につけるべき資質・能力」は、知識・技能、思考力・判断力・表現力等の能力、主体性を持って多様な人々と協働する態度等を指す。

【観点 1-2-2】 教育課程の編成及び実施に関する方針では、卒業の認定に関する方針を踏まえた教育課程編成、当該教育課程における教育内容・方法、学修成果の評価の在り方等が具体的に設定されていること。

- 【観点 1-2-3】 教育課程の編成及び実施に関する方針は、学習の質を重視し、学習・教授方法及び成績評価のための課題が意図する成果のために想定された学習活動に整合するように設定されていることが望ましい。
- 【観点 1-2-4】 入学者の受入れに関する方針では、卒業の認定に関する方針並びに教育課程の編成及び実施に関する方針を踏まえ、どのような学生を求め、多様な学生をどのように評価・選抜するか等が具体的に設定されていること。
- 【観点 1-2-5】 三つの方針が、教職員及び学生に周知が図られるとともに、ホームページ等で公表されていること。

### 〔現状〕

本学並びに本学部の教育理念、教育研究上の目的を実現するための方策として、卒業の認定に関する方針（ディプロマ・ポリシー）、教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー）及び入学者の受入れに関する方針（アドミッション・ポリシー）を策定している。これら三つの方針は学生便覧及び大学公式ホームページにて公表され、広く周知されている。

#### 〈ディプロマ・ポリシー〉

学科では所定の単位を修得し、次に掲げる学科の特性を考慮した学科ディプロマ・ポリシーを達成した学生に学位を授与する。

- DP1：薬学に関する基礎および専門的な知識・技能をバランスよく有している。
- DP2：問題の発見から解決までの一連のプロセスの中で、必要な情報を収集し、科学的根拠に基づき論理的に考え行動できる。
- DP3：医療人を目指す者として、人間理解、国際的感覚を養い、相手に寄り添ったコミュニケーションを実施できる。
- DP4：薬剤師を目指す者として、使命感・倫理観・責任感を養い、他職種との連携を通して薬剤師の役割を理解、実践できる。
- DP5：保健・医療・福祉について、日本にとどまらず世界の情勢を広く理解し、地域に貢献する姿勢と実践能力を有している。
- DP6：医療の担い手を目指す者として、幅広い教養と豊かな人間性を育み、生涯にわたって自他ともに研鑽しあえる姿勢および意欲を有している。
- DP7：生命科学的知識および研究マインドを基に、薬物療法を実践する能力を有している。

### ＜カリキュラム・ポリシー＞

薬学科では教育目標を学生が達成できるよう、次の方針に則り教育課程を編成・実施する。

#### CP1：

- a. 薬学の専門家として必要な知識・技能を修得するために、講義、演習、実習を相互に関連付けて科目を配置する。
- b. 薬物治療の実践的能力を高めるために、知識・技能を統合した能動的学修を実施する。

#### CP2：

- a. 問題発見から解決する能力および科学的根拠に基づいた論理的思考力を養うために、問題解決型学修（PBL）をはじめとする能動的学修を講義、演習、実習で実施する。また、参加型実践的科目として卒業研究を配置する。
- b. 薬剤師として臨床での総合的实践能力を身につけるために、参加体験型学修である実務実習を行う。

#### CP3：

- a. 医療人としてのコミュニケーション能力を養成するために、ロールプレイを含む参加型実習を行う。
- b. 薬剤師の役割を理解するために、他職種との連携教育を実施する。

#### CP4：

- a. 薬剤師としての使命感・倫理観・責任感および豊かな人間性を涵養するために、スモールグループディスカッション（SGD）等を含めた講義、演習、体験実習を配置する。
- b. 国際的な感覚を養うために、世界の保健福祉事情に触れ、語学能力を高める機会を設ける。
- c. 生涯にわたり自ら研鑽できる医療の担い手になるために、ポートフォリオを用いた形成的自己評価の機会を設ける。

学業の成績は、授業参加態度、試験成績評価、レポート評価、課題達成状況などシラバスに記載される到達目標の学修到達度を評価して判断する。

### ＜アドミッション・ポリシー＞

#### 1. 求める学生像

本学入学者に求める要件を十分理解し、薬剤師として、豊かな心、コミュニケーション能力、新しい知識の追求に向けた関心や意欲を持ち、日々進化する薬物療法にお



ける高度化・専門化及び国際化に対応し、学びを深めるための科学的根拠に基づく論理的思考力を身に付けることが期待できる人材。

## 2. 薬学科の入学者に求める能力

### 1) 知識・技能

高等学校等で学んだ教科に相応した基礎知識と、化学等の理数系科目の修得を通して身につけた科学的な思考力・理解力、また、語学系科目（英語）の修得を通して身につけた読解力

### 2) 思考力・判断力・表現力

薬剤師に必要な新しい知識を学ぶ意欲及び主体的な目標設定を基に努力を継続する力、自ら思考し、判断したことを適切に表現する力

### 3) 主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度

本学の基本理念及び教育理念を十分理解し、薬剤師として「共に生きる社会」の実現に寄与する意志を持つ者、他者と協調的に連携を図り、地域とのつながりを大切に考え、薬学の発展に貢献したいという強い意欲を基に自他ともに研鑽しあう意志を持つ人であること。

#### 【基準 1-3】

教育研究上の目的及び三つの方針が定期的に検証されていること。

注釈：「検証」は、医療を取り巻く環境や薬剤師に対する社会のニーズの変化を調査した結果等を踏まえて行うこと。

#### 【現状】

本学部における教育研究上の目的及び三つの方針の検証は、「成田薬学部自己点検・評価委員会」にて、行うことを確認した。

#### 【教育研究上の目的と三つの方針に対する点検・評価】

教育研究上の目的に関しては、点検の際に医療を取り巻く環境、薬剤師に対する社会のニーズを反映したものとなっていることを確認した。【観点 1-1-1】また、教育研究上の目的は、学生便覧にて公表され、教職員及び学生に周知されている。【観点 1-1-2】各入試選抜で重視するポイント」を、2025 年度募集要項からアクセスできる環境を整えた上で、本学ホームページにアドミッション・ポリシーとともに掲載した。ディプロマ・ポリシーについてはカリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーの再検証や科目間連携の確認等の結果を踏まえて、今後審議を進めていく方針とした。教育目標については、「コンピテンシーに基づく到達度評価」との整合性を確認した。ディプロマ・ポリシーは、卒業までに学生が身につけるべき資質・能力（コンピテンシー）を具体的に設定している。

#### 【観点 1-2-1】

カリキュラム・ポリシーは、卒業までに学生が身につけるべきコンピテンシーを成長させるための方策として設定され、4つの学士力である「知識、理解」「総合的な学習経験と創造的志向」「汎用的技能」「態度、志向性」を基に分類している。また、カリキュラム・ポリシーには、コンピテンシーごとの質を考慮し、学修成果（目標）と教授・学修活動が示されている。さらに、ディプロマ・ポリシーを踏まえて教育内容・方法、学修成果の評価の在り方等が具体的に設定されており、教育内容についてはカリキュラム・ツリー及びカリキュラム・マップによって可視化されている。評価については、「学業の成績は、授業参加態度、試験成績評価、レポート評価、課題達成状況などシラバスに記載される到達目標の学修到達度を評価して判断する」と記されている。加えて、ディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーに基づき、コンピテンシーに基づく到達度評価が策定されており、具体的な教育法と評価法が記載されている。年度初めのチューター面談において、学生に評価基準を確認させることにより、目標達成のための具体的な行動について気づきの機会を提供し、教員との対話により形成的な評価になるような工夫がなされている。【観点 1-2-2】【観点 1-2-3】

アドミッション・ポリシーでは、薬学科の求める学生像および薬学科の入学者に求める要件が示されている。また、入試選抜で重視する資質・能力を可視化するために、アドミッション・ポリシーに示す学力の3要素の評価の重点度を選抜方式ごとに示した一覧表を作成し、大学公式ホームページで公表している。【観点 1-2-4】

三つの方針については、教職員及び学生に周知が図られるとともに、大学公式ホームページで公表されている。また、本学のポータルサイト（UNIVERSAL PASSPORT）にて常時確認できるようにしている。さらに、アドミッション・ポリシーは大学公式ホームページに公表するとともに、入試ガイドにも明記することで受験生への周知に努めている。【観点 1-2-5】

### ＜優れた点＞

アドミッション・ポリシーに示す学力の3要素の評価の重点度を選抜方式ごとに示した一覧表を公表している。

### ＜改善を要する点＞

本学は3キャンパスに薬学部を有しているため、全薬学部合同での検証も重要と考える。

### 〔改善計画〕

三つの方針については、薬学教育モデル・コア・カリキュラム（令和4年度改訂版）に対応した教育の内容や、点検と必要に応じた修正を行っていく。また、評価に関しては、カリキュラム・ポリシーへの追加またはアセスメント・ポリシーの設定など、大学内で統一を図る必要がある。3キャンパス薬学部間でのポリシーの共通化については、各薬学部の特色を踏まえて協議を進める。

## 2 内部質保証

### 【基準 2-1】

教育研究上の目的及び三つの方針に基づく教育研究活動について、自己点検・評価が適切に行われていること。

【観点 2-1-1】 自己点検・評価が組織的かつ計画的に行われていること。

【観点 2-1-2】 自己点検・評価は、教育研究活動に対する質的・量的な解析に基づいていること。

【観点 2-1-3】 自己点検・評価の結果がホームページ等で公表されていること。

### 〔現状〕

2024 年度は構成教職員が少ないこともあり、学部内委員会設置は行わず、全教職員を対象とした学科会議を開催した。本会議は、前期には週 1 回、後期には 2 週間に 1 回の頻度で実施し、自己点検・評価の 8 項目（教育研究上の目的と三つの方針、内部質保証、薬学教育カリキュラム、学生の受入れ、教員組織・職員組織、学生の支援、施設・設備、社会連携・社会貢献）に沿って進行した。加えて、各学部学科代表者が参加する全学の各種委員会及び薬学部内からの協議事項、報告事項について全教職員で情報共有し、協議を行った。協議事項の増加に伴い、より効率的な会議運営が必要となったため、2025 年度からは学科内委員会として「成田薬学部自己点検・評価委員会」、「薬学教務委員会」、「薬学学生委員会」、「薬学広報委員会」、「実務実習準備委員会」、「機器管理委員会」、「CBT 実施委員会」、「薬学 FD 研修委員会」、「キャリアデザイン委員会」、「薬用植物園管理委員会」を立ち上げるようになった。これにより、各委員会で関連する協議・報告事項を事前に精査し、その内容を月 1 回の学科会議で諮る体制へと移行することになった。【観点 2-1-1】

教育研究活動の自己点検・評価では、教育研究の質保証の観点から、ディプロマ・ポリシーで要求されている学生の能力・資質の到達度を自己評価し、更なる成長を促すために「コンピテンシーに基づく到達度評価」を作成している。この評価表に基づき、年度末のチューター面談時、各学年における到達度評価及び卒業時の到達度評価を行っている。【観点 2-1-2】

2024 年度の自己点検・評価は自己点検・評価書として取りまとめの上、大学ホームページで 2025 年度夏以降に公開予定である。次年度以降も、自己点検・評価書を作成の上、大学ホームページに毎年掲載予定である。【観点 2-1-3】

## 【基準 2-2】

教育研究活動の改善が、自己点検・評価結果等に基づいて適切に行われていること。

### 〔現状〕

2024年度の自己点検・評価は、学科会議内で教育研究活動に対する質的・量的な解析に基づいて行った。2025年度からの教員の増員により、薬学独自の自己点検・評価を行うための、「成田薬学部自己点検・評価委員会」を年度末に設置することが決まった。本委員会は、本学部の教授・准教授計8名から構成されており、2025年度より開催し、恒久的な自己点検・評価を実施する予定である。

教育研究の質的・量的な向上を目的に、全学主催FD研修会が年2回と成田キャンパス主催FD研修会が年1回、全3回、毎年開催されている。教員はこれらの研修会への参加が義務づけられている。2024年度は「学生の非認知能力の育成」、「2024年度FD活動報告」（全学主催FD研修会）、「学生相談室の現状について」、「Teamsを使いこなそう」（成田キャンパス主催FD研修会）というテーマで講演が行われた。薬学部全教員もこれらの研修会に参加し、各々、教育研究の更なる向上を目指して、自己研鑽した。本FD委員会では、教員の教育に対するモチベーション維持のために、学生評価に基づくグッドティーチング賞を設け、年度末に毎回1～2名にキャンパス毎で授与している。なお、薬学FD研修委員会が年度末に設置されたことに伴い、2025年度以降薬学独自のFD研修会も計画している。

学生の学力向上のために、各授業でオフィスアワーを設置し、積極的に活用するよう促している。また、オフィスアワー以外でも教員にアポイントを取ることで、講義内容に関する疑問点や質問に随時対応する体制としている。加えて、薬学の基礎となる「化学」の補講を3回行った。補講内容は単位未修得者及び成績下位の学生からの要望に基づいて選択した。これらの対策により、95%と高い進級率であった。研究活動を行うための機器および施設・設備の整備を行っている。2024年度は公津の杜校舎内に化学系薬学（WA棟9階）と生物系薬学（WA棟8階）の実験施設を整備した。分析機器類の導入は不十分であるが、それぞれの施設でできる限りの研究を遂行している。必要な分析機器類は年度毎に随時購入し、充実させていく予定である。2026年度に新設される畑ヶ田校舎内には生物系薬学、物理系薬学及び医学部との共同研究のための施設・設備を設置予定であり、現在、校舎の建設と導入機器類の選定中である。また本学の特徴を活かして、医学部を含めた他学部他学科との共同研究や研究協力の道を模索している。

### 〔内部質保証に対する点検・評価〕

本学部専任教員から構成される学科会議内で、教育活動に対する質的・量的な解析に基づいて、自己点検・評価を行った。大学での学習方法を学生に啓発したり、成績下位層の学生への補習授業をしたりしたことで、高い進級率を達成できた。

研究活動は、研究環境が不十分なところがあるものの、可能な範囲で遂行している。

#### ＜優れた点＞

1. オフィスアワー以外にも、随時学生からの質問に答えることで、学生の学習へのモチベーションを維持してきた。
2. 不十分な研究環境ではあるが、一部研究を遂行することができた。

#### ＜改善を要する点＞

1. 成績下位層の学生に対する、学習意欲の向上を目指す。
2. 研究環境の充実。

#### 〔改善計画〕

本学部独自の委員会を立ち上げたことから、各委員会で教育研究に関する質的・量的な解析を行い、学生の学習意欲維持および、成績下位層の底上げに必要な方策を立てて実行していく。

教育研究に関する薬学独自の FD 活動を推進することで、更なる教育研究活動の充実を図る予定である。

研究環境が不十分な事による研究活動の停滞を改善するべく、必要な施設・設備の増強を大学側に要望していくため、「研究推進委員会（仮称）」の立ち上げを検討する。

### 3 薬学教育カリキュラム

#### (3-1) 教育課程の編成

##### 【基準 3-1-1】

薬学教育カリキュラムが、教育課程の編成及び実施に関する方針に基づいて構築されていること。

【観点 3-1-1-1】 教育課程の編成及び実施に関する方針に基づき、薬学教育カリキュラムが以下の内容を含み体系的に整理され、効果的に編成されていること。

- 教養教育
- 語学教育
- 人の行動と心理に関する教育
- 薬学教育モデル・コアカリキュラム平成 25 年度改訂版の各項目（基本事項・薬学と社会・薬学基礎・衛生薬学・医療薬学・薬学臨床・薬学研究）

補足：令和 6 年度入学生以降については、薬学教育モデル・コア・カリキュラム令和 4 年度改訂版に沿った内容とします。

- 大学独自の教育
- 問題発見・問題解決能力の醸成のための教育

注釈：薬学教育カリキュラムの体系性及び科目の順次性が、カリキュラム・ツリー等を用いて明示されていること。

注釈：語学教育には、医療の進歩・変革に対応し、医療現場で活用できる語学力を身につける教育を含む。

【観点 3-1-1-2】 薬学教育カリキュラムが、薬学共用試験や薬剤師国家試験の合格率の向上のみを目指した編成になっていないこと。

【観点 3-1-1-3】 教育課程及びその内容、方法の適切性について検証され、その結果に基づき必要に応じて改善・向上が図られていること。

##### 〔現状〕

本学部は、「薬学教育モデル・コアカリキュラム令和 4 年度改訂版」の運用開始と時を同じくして開設された。そのため、新コアカリキュラムに沿った教育課程を、カリキュラム・マップおよびカリキュラム・ツリー（履修系統図）を明示して体系的に編成している。

教養・語学教育は、必修科目である「法学」「数学」「化学」「生物学」「データリテラシー」「英語講読 1」「英語 CALL1」以外に、総合教育科目として多様なプログラムを選択履修できるように工夫した時間割を設定している。

人の行動と心理に関する教育は、「心理学」「コミュニケーション概論」「臨床心理学概論」を必修科目としている。

専門教育科目は、コアカリキュラムに沿って「薬学概論」「解剖生理学 I」「分析化学 I」「有機化学 I」「生化学 I」「薬品物理化学 I」「基礎統計学」の必修講義科目、および「早期体験実習」「基礎薬学実習」を 1 年次から展開している。

大学独自の教育として、本学の全学部共通の重点必修科目である「大学入門講座－医療人・社会人として成長するために－」「医療必修－医療の倫理とプロ意識・医療情報－」を行っている。これらは、提示された課題に対するグループワーク（SGD）を含む科目であり、問題発見・問題解決能力の醸成のための教育となっている。

### 〔教育課程の編成に対する点検・評価〕

本学部で編成されたカリキュラムは、初年度として大きな混乱もなく適用された。それらの優れた点、および改善を要する点について、下記に示す。

#### ＜優れた点＞

1. 専門科目と総合教育科目をバランスよく履修できるようなカリキュラムを設定した。「化学」から「分析化学 I」・「有機化学 I」へ、「生物学」から「生化学 I」・「解剖生理学 I」へと系統かつ発展的な教育内容となっていた。
2. 「薬学概論」では、薬局・病院だけでなく千葉県（公務員）や企業など多彩な外部講師を招聘した。
3. 「早期体験実習」において、薬局・病院・卸売業者・製薬企業への訪問を実施できた。
4. 「大学入門講座－医療人・社会人として成長するために－」「医療必修－医療の倫理とプロ意識・医療情報－」では、学部学科を超えたメンバーによるグループワークを行った。
5. 「基礎薬学実習」では本学の指針に基づき、動物実験を行うための教育訓練を行い、早期の研究倫理教育とした。

#### ＜改善を要する点＞

1. 「早期体験実習」における薬局・病院・卸売業者・製薬企業への訪問を全て実施するには時間的にも大きな負担であった。
2. 「基礎薬学実習」の内容が過密となってしまう課題があった。

### 〔改善計画〕

2024 年度は 1 年次のみ在籍であり、大きな混乱もなく適用したが、2025 年度は 2 学年分の学生でのカリキュラム編成となるため、全体の体制がバランスよく実施できるように編成を進める。また、上記の改善を要する点については下記に示す。

1. 「早期体験実習」における薬局・病院・卸売業者・製薬企業への訪問を全て実施するには大きな負担であり、特に卸売業者と製薬企業についてはどちらか一方の訪問で調整する。
2. 「基礎薬学実習」において過密となったのは物理系の課題であり、その内容の見直しを進める。



### (3-2) 教育課程の実施

#### 【基準 3-2-1】

教育課程の編成及び実施に関する方針に基づいた教育が適切に行われていること。

【観点 3-2-1-1】 学習目標の達成に適した学習方略が用いられていること。

注釈：例えば薬学研究では、必修単位化、十分な研究期間の設定、研究論文の作成、研究成果の医療や薬学における位置づけの考察、研究発表会が行われていること。

【観点 3-2-1-2】 薬学臨床における実務実習が「薬学実務実習に関するガイドライン」を踏まえて適切に行われていること。

【観点 3-2-1-3】 学生の資質・能力の向上に資する学習・教授・評価方法を開発していることが望ましい。

注釈：「資質・能力の向上に資する学習・教授・評価方法」には、主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）やパフォーマンス評価を含む。

#### 〔現状〕

本学部のカリキュラムは学年別の単位制として編成している。その実施に関するカリキュラム方針に基づいた講義、演習および実習形式を構成し、それぞれに適した学習方略をもって教育を行っている。それらは各科目のシラバスへの記載をもって適切に進めている。カリキュラム実施内容は、学生便覧に記載の科目リスト、カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー（履修系統図）として明示している。1年次のみの現況を下記に示す。

##### 1. 講義形式

知識の修得を目的とした対面およびVODを用いた座学で実施している。講義内では小テストや確認試験、アクティブラーニングを取入れ、一方向性の教育にならないように行っている。

##### 2. 演習形式

知識をより深めるために、例えば「有機化学演習」では化学構造分子作成ツールを用いたグループワークを導入する等の工夫をしている。また、倫理教育に関わる「大学入門講座－医療人・社会人として成長するために－」「医療必修－医療の倫理とプロ意識・医療情報－」では、SGDと成果発表を実施している。

##### 3. 実習形式

実技・技能の修得を目的とした「基礎薬学実習」では実験課題を実施して、講義で修得した知識を深めて、ワークシート提出を義務付けている。

**【基準 3-2-2】**

各科目の成績評価が、公正かつ厳格に行われていること。

【観点 3-2-2-1】 各科目において適切な成績評価の方法・基準が設定され、学生への周知が図られていること。

【観点 3-2-2-2】 各科目の成績評価が、設定された方法・基準に従って公正かつ厳格に行われていること。

【観点 3-2-2-3】 成績評価の結果が、必要な関連情報とともに当事者である学生に告知されるとともに、成績評価に対しての学生からの異議申立の仕組みが整備され、学生へ周知が図られていること。

**〔現状〕**

本学の成績評価の方法・基準の設定は入学時の学生便覧に記載して、学生への周知を行っている。成績評価は、学則第 29 条に「成績の評価は、秀 (S)、優 (A)、良 (B)、可 (C)、不可 (D) の 5 種とし、秀 (S)、優 (A)、良 (B)、可 (C) を合格、不可 (D) を不合格とする」と定められている。また、本学では Grade Point Average (GPA) 及び f-GPA 制度を導入し、その算出方法並びに適用範囲も学生便覧に記載している。

各科目の成績評価は、シラバスに評価方法の種類（定期試験、実技試験、小テスト、レポートなど）、およびその比率を記載して公正・厳格に評価している。成績評価の結果は、半期ごとに本学運営のポータルサイト（UNIVERSAL PASSPORT）にて学生および保護者とともに成績一覧を確認することができる。成績開示から一定期間、教務課を窓口で成績の異議申し立てができることを学生に周知している。

**【基準 3-2-3】**

進級が、公正かつ厳格に判定されていること。

【観点 3-2-3-1】 進級判定基準、留年の場合の取扱い等が設定され、学生への周知が図られていること。

注釈：「留年の場合の取扱い」には、留年生に対する上位学年配当の授業科目の履修を制限する制度、再履修を要する科目の範囲等を含む。

【観点 3-2-3-2】 各学年の進級判定が、設定された基準に従って公正かつ厳格に行われていること。

**〔現状〕**

本学部の進級判定基準、留年の場合の取扱い等の設定は、入学時の学生便覧で周知している。入学時のガイダンス、半期ごとに行うガイダンス等、複数回の説明を行っている。2024 年度入学生の 2 年次への進級要件は次のとおり、＜1 学年から 2 学年へ

の進級条件：1 学年の必修科目（34 単位）のうち、すべての実習単位（2 単位）を含む 28 単位以上を修得していること。＞である。また、留年した場合は次の通り、＜①合格した科目の単位は認められる。②不合格の必修科目は再履修し修得しなければならない。③不合格になった選択科目は、新たに希望して選択するものとする。④必修・選択科目とも前年度不合格であった科目の評点は取消し、無効とする。⑤在学年限について：同一学年における在学年数を 2 年以内とする（休学期間を除く）。但し、5、6 学年は通算で 4 年間在籍できる。＞である。

進級判定は、学科会議（2025 年 2 月 18 日）にて科目担当者から提出された成績結果を基に公正・厳格に行われた。開設初年度の入学者 121 名中、115 名が 2 年次へと進級（95.0%）した。留年者 6 名のうち、退学者および休学者を除く 2 名が修学継続となり、留学生ガイダンスを実施して再履修科目への対応、自学習の習慣化などを指導することになった。また、学習意欲のモチベーションを維持するため、単位取得済科目および 2 年次科目の聴講を認める方針とした。

#### 【基準 3-2-4】

卒業認定が、公正かつ厳格に行われていること。

【観点 3-2-4-1】 卒業認定の判定基準が卒業の認定に関する方針に基づいて適切に設定され、学生への周知が図られていること。

【観点 3-2-4-2】 卒業に必要な単位数の修得だけではなく、卒業の認定に関する方針に掲げた学生が身につけるべき資質・能力の評価を含むことが望ましい。

【観点 3-2-4-3】 卒業認定が判定基準に従って適切な時期に、公正かつ厳格に行われていること。

注釈：「適切な時期」とは、卒業見込者が当該年度の薬剤師国家試験を受験できる時期を指す。

#### 〔現状〕

本学部は開設初年度であり、卒業認定はまだ行われていない。しかしながら、卒業要件を満たすための履修科目に関する理解を促すため、ガイダンス毎に学生便覧に記載されている旨を周知徹底している。また、ディプロマ・ポリシーのコンピテンシーに基づく到達度評価を行い、学生が身につけるべき資質・能力を形成的に評価している。

### 【基準 3-2-5】

履修指導が適切に行われていること。

注釈：「履修指導」には、日々の履修指導のほか、入学者に対する薬学教育の全体像を俯瞰できるような導入ガイダンス、入学までの学習歴等に応じた履修指導、「薬学実務実習に関するガイドライン」を踏まえた実務実習ガイダンス、留年生・卒業延期者に対する履修指導を含む。

### 〔現状〕

本学成田キャンパスの新入生は、入学時のオリエンテーションとして学生便覧に記載の学則、卒業に必要な単位、履修科目の種類（専門教育科目と総合教育科目および必修・選択科目）、履修登録の方法などの共通項目を教務課により実施される。さらに学科別のオリエンテーションにより、本学部のディプロマ・ポリシーの説明、6年にわたる薬学教育の全体像などの概略他、1年次の履修指導（時間割作成）を実施した。また、高校時の理科系科目の履修状況アンケートおよび学修定着状況を把握するためのプレイスメントテスト（物理・数学・化学・生物）を実施して、個別の履修指導へと役立てている。本学部ではチューター制により学生個々の生活および履修指導を行うため、少なくとも前期・後期に面談を実施している。そこでは、半期ごとに生活・学修目標の設定と振り返りをポートフォリオとして作成し、活用している。

前期の定期試験前には試験に向けた心構え、注意事項、試験期間、成績開示や問い合わせ方法などについて、また後期開始前には後期履修科目（実習含）の履修指導、学修への心構えなどをガイダンスにより指導している。

入学前教育について、初年度は推薦型選抜にて入学予定となった学生に薬に関する本の感想文を義務付けたが、その効果に疑問があった。そこで、2年目は入学予定学生に本学へ来てもらい、プレテスト（物理・化学・生物）を含むスクーリングを1月に実施した。

### 〔教育課程の実施に対する点検・評価〕

#### 【基準 3-2-1】

1年次の講義科目では基礎学力の定着が必要であり、多くの科目で学習目標を達成するために小テストや確認試験などを実施し、一方向性の教育にならないように工夫していると評価した。演習科目では複数回のグループワークと成果発表が行われ、主体的・対話的な深い学びが行われていた。実習科目では行った実験課題の成果をワークシートへの記載と提出により正しく行われていた。

**【基準 3-2-2】**

各科目の成績評価方法と基準はシラバスにて周知徹底されており、それに従って公正・厳格に評価されていた。成績開示後、学生からの異議申し立てがあった科目では適切な対応が行われ、トラブルになるような評価は無かった。保護者への成績開示も適切に行われていた。

**【基準 3-2-3】**

本学部の進級判定基準は学生および保護者への周知徹底が行われていた。そのため、単位未修得科目が基準を超えた学生に対して留年となる旨を伝えた場合、それを受け入れられていることから公正かつ厳格に判定されていると評価できる。

**【基準 3-2-4】**

開設初年度の本学部では、卒業認定が行われていないため、点検・評価の対象外とする。

**【基準 3-2-5】**

入学時のオリエンテーション、定期試験前ガイダンス、後期ガイダンスなどを適切な時期に開催して、多くの情報を学生へ周知してきたと評価できる。また、チューター教員による複数回の面談（履修指導）は、成績不良者をフォローする手段として評価できる。

入学前教育の新たな試みとして、入学予定学生へのスクーリングを実施することができた。

**<優れた点>**

**【基準 3-2-1】**

1年次から学科横断のグループワークが導入されている。

**【基準 3-2-2】**

成績評価方法は、複数種類を組み合わせた総合評価で行われている。

**【基準 3-2-3】**

本学部の進級判定は全教員が参加する学科会議にて行うため、成績不良者を共通認識して、その後の対応に当たることができる。

**【基準 3-2-4】**

ディプロマ・ポリシーのコンピテンシーに基づく到達度評価を開始した。

**【基準 3-2-5】**

チューター制により、学生個々の指導を手厚くすることができる。また、入学予定学生へのスクーリングは全員が来学して実施できた。

**<改善を要する点>**

**【基準 3-2-1】**

カリキュラムの中にVOD科目があり、学生による視聴の有無を正確に判断できない場合がある。

**【基準 3-2-2】**

「基礎薬学実習」の評価において、評価が高くなる傾向にあった。

**【基準 3-2-3】**

2年次への進級率は95.0%であったが、再履修科目を持つ学生が少なくない。

**【基準 3-2-4】**

ディプロマ・ポリシーのコンピテンシーに基づく到達度評価を卒業認定の判定基準として学生便覧へ記載していない。

**【基準 3-2-5】**

スクーリングを行った入学前教育の効果は、まだ評価できていない。

**[改善計画]**

**【基準 3-2-1】**

VOD科目の視聴の有無を正確に判断できるシステムの検討を行う。

**【基準 3-2-2】**

「基礎薬学実習」の評価に用いるルーブリック評価の修正を行う。

**【基準 3-2-3】**

成績不良者の割合を減らす底上げの試みとして、学年を超えた学習グループをつくり縦関係のつながりで学修効果の向上を目指す。

**【基準 3-2-4】**

ディプロマ・ポリシーのコンピテンシーに基づく到達度評価を卒業認定の判定基準として学生便覧に記載するかを検討する。

**【基準 3-2-5】**

スクーリングを含む入学前教育を受けた学生の成績を追跡し、その効果について評価を行う。

### (3-3) 学修成果の評価

#### 【基準 3-3-1】

学修成果の評価が、教育課程の編成及び実施に関する方針に基づいて適切に行われていること。

注釈：学修成果は、教育課程の修了時に学生が身につけるべき資質・能力を意味する。

【観点 3-3-1-1】 学生が身につけるべき資質・能力が、教育課程の進行に対応して評価されていること。

注釈：評価に際しては、教育課程の編成及び実施に関する方針に基づいて適切に評価計画（例えば教育課程の編成及び実施に関する方針に基づいて設定したカリキュラムに則った教育の実施により、いつ、どのような方法で測定するか）の計画）が策定されていることが望ましい。

【観点 3-3-1-2】 実務実習を履修するために必要な資質・能力が、薬学共用試験（CBT及びOSCE）を通じて確認されていること。

注釈：実務実習を行うために必要な資質・能力を修得していることが、薬学共用試験センターの提示した基準点に基づいて確認されていること。薬学共用試験（CBT及びOSCE）の実施時期、実施方法、合格者数及び合格基準が公表されていること。

【観点 3-3-1-3】 学修成果の評価結果が、教育課程の編成及び実施の改善・向上に活用されていること。

#### 〔現状〕

本学部は3ポリシー〔ディプロマ・ポリシー（DP）、カリキュラム・ポリシー（CP）、アドミッション・ポリシー（AP）〕に基づいて、カリキュラム・マップおよびカリキュラム・ツリーを作成して学生便覧で明示している。カリキュラム・マップでは、DPと学年進行上のカリキュラム編成の相関性が明らかであり、その学修成果の積み上げをカリキュラム・ツリーとともに確認することができる。学生自身がこれらを形式的に自己評価するために「コンピテンシーに基づく到達度評価表」を用いて各学年での総括的評価を行えるようにしている。将来的に実務実習を行うために必要な資質・能力については、薬学共用試験（CBT、OSCE）を通じて確認されることになる。

学習成果の評価につながる教育的質の向上について、各科目の学生アンケート結果を教育内容の振り返り、次年度への改善に向けて有効活用している。

#### 〔学修成果の評価に対する点検・評価〕

本学部は開設初年度のため、学習成果の積み上げを評価するには時期尚早すぎる。しかし、2年次への進級率は95.0%であったことから教育的質は一定程度担保された

と評価できる。次年度以降も学習成果の評価結果が高く推移できるように継続する必要がある。

#### ＜優れた点＞

本学部の教員が責任者である科目の学生アンケートは、回答率が 90%以上である。

#### ＜改善を要する点＞

今後の学年進行とともに DP で求められるカリキュラム編成の整合性の評価をどのように行うかを検討する必要がある。

#### 〔改善計画〕

カリキュラム編成を総体的に評価するためには、本学の三つの薬学部で行われているカリキュラムに対する意見交換を始めることが教育的質の向上にもつながる。最初は学部長間の意見交換から現場同士で情報を共有できる体制の検討を行う。



## 4 学生の受入れ

### 【基準 4-1】

入学者（編入学を含む）の資質・能力が、入学者の受入れに関する方針に基づいて適切に評価されていること。

【観点 4-1-1】入学者の評価と受入れの決定が、責任ある体制の下で適切に行われていること。

【観点 4-1-2】学力の3要素が、多面的・総合的に評価されていること。

注釈：「学力の3要素」とは、知識・技能、思考力・判断力・表現力等の能力、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を指す。

【観点 4-1-3】医療人を目指す者としての資質・能力を評価するための工夫がなされていること。

【観点 4-1-4】入学を希望する者への合理的な配慮に基づく公平な入学者選抜の機会を提供していること。

注釈：「合理的な配慮」とは、障がいのある方が日常生活や社会生活で受けるさまざまな制限をもたらす原因となる社会的障壁を取り除くために、障がいのある方に対し、負担になり過ぎない範囲で、個別の状況に応じて行われる配慮を指す。

【観点 4-1-5】入学者の資質・能力について検証され、その結果に基づき必要に応じて入学者受入れの改善・向上等が図られていること。

注釈：学力の3要素に対応した試験方式の見直しのほか、入学後の進路変更指導等も含む。

### 〔現状〕

入学者受入れに関する方針は、アドミッション・ポリシーとして当学科ホームページに掲載され、本ポリシーに基づいて志願者を評価する入学試験を行っている。

入学試験は、多面的・総合的に評価できるよう、入試区分ごとに志願者の資質・能力を総合的に評価している。併願制入試の特待奨学生特別選抜、一般選抜前期、大学入学共通テスト利用選抜、一般選抜後期では、入学後の教育成果が高い学修レベルまで到達できるよう、「高校までの学力および知識」、特に理数系科目の理解度を重視した選抜を行っている。また、一般選抜後期では当該年度の最終入試区分であるため、医療人を目指す意欲を適切に評価できるよう、個人面接を取り入れている。一方、専願制入試である学校推薦型選抜では、基礎学力および医療人を目指す者としての資質・能力を重視した評価を行っている。さらに、学校推薦型選抜では、基礎学力に加えて小論文と10分程度の個人面接で医療人としての資質を総合的に評価できるよう工夫している。

入学後に薬学教育の内容を深く理解するためには、語学と化学が重要と考えている。そこで、留学生特別選抜を除くすべての入試区分で、英語および化学を必須科目としている。英語と化学のほかは、物理、生物、数学を組み合わせた入学試験を行うこと

で、思考力・判断力がある学生を選抜している。なお、全ての入試区分において、志願理由書の書類作成上の注意の欄に、「学科アドミSSION・ポリシー（入学者受け入れの方針）を確認し、学科の求める学生像・要件をふまえ、志願理由や医療福祉専門職を目指す理由および入学後の目標と抱負を、志願者が自筆で記入してください。」と明記し、医療人としての資質が評価できるよう工夫している。

上記の入学試験の合否判定は、成田薬学部教員代表者会議、入学試験判定会議、専任教員代表者会議において審議され、各々責任ある体制のもとで適切かつ公平に実施されている。

上記【観点 4-1-4】に関しては、特別支援学校などから学生を受け入れており、合理的な配慮に基づく公平な入学者選抜の機会が提供されている。

入学者の資質・能力についての検証は、在学生の成績と入試成績を入試区分ごとに分析し、その結果を薬学部内で共有して検証が行われている。この検証結果は、必要に応じて入試区分ごとの選抜方法の改善に使用される。

2024 年度に行われた主な入試区分は以下の通りである。

学校推薦型選抜（学科適性試験、小論文、個人面接）、特待奨学生特別選抜（学力試験）、一般選抜前期（学力試験）、大学入学共通テスト利用選抜（大学入学共通テスト）、一般選抜後期（学力試験、個人面接）

#### 【基準 4-2】

入学者数が入学定員数と乖離していないこと。

【観点 4-2-1】 最近 6 年間の入学者数が入学定員数を大きく上回っていないこと。

【観点 4-2-2】 入学者数の適切性について検証が行われ、必要に応じて改善が図られていること。

#### 〔現状〕

2024 年度の入学者数と入学定員数の割合（入学者数/入学定員数）は 1.01 であり、入学者数は入学定員数を大きく上回らず、適正な入学者数を確保している。

入学者数の適切性については、本学部教員が入学者選抜に直接関与する「成田薬学部教員代表者会議」での合格者選抜から検証されている。

#### 〔学生の実入れに対する点検・評価〕

入学の資質・能力は、入学者受け入れに関する方針（アドミSSION・ポリシー）に基づいた 6 種類の入試区分によって評価されており、【基準 4-1】に適合している。

入学者数の適切性については、【基準 4-2】に適合している。

### ＜優れた点＞

入学者の適性および能力の評価については、当学科のホームページでも周知されているアドミッション・ポリシーに則り、基礎学力および医療人としての適性を評価している。多様な入試制度を設けることで高い学修意欲と薬剤師への熱意を持つ優秀な学生をバランスよく選抜している。

入学定員数および入学者数の観点では、入学者数は入学定員数と大きな乖離はなく、適正な入学者数が確保できている。

### ＜改善を要する点＞

志願者の大半が千葉県出身であり限定されている。

### 〔改善計画〕

千葉県以外の地方説明会などを積極的に行い、幅広く学生募集活動に力を入れる予定である。

## 5 教員組織・職員組織

### 【基準 5-1】

教育研究上の目的に沿った教育研究活動の実施に必要な教員組織が整備されていること。

補足：令和4年度大学設置基準等の改正に基づき、「専任教員」は「専任教員又は基幹教員」と読み替えます。

【観点 5-1-1】 教育研究活動の実施に必要な教員組織の編成方針を定めていること。

【観点 5-1-2】 専任教員数については法令に定められている数以上であること。また、教授、准教授、講師、助教の人数比率及び年齢構成が適切であること。

注釈：教授は大学設置基準に定める専任教員数の半数以上

【観点 5-1-3】 1名の専任教員に対して学生数が10名以内であることが望ましい。

【観点 5-1-4】 専門分野について、教育上及び研究上の優れた実績を有する者、又は優れた知識・経験及び高度の技術・技能を有する者のいずれかに該当し、かつ、その担当する専門分野に関する教育上の指導能力と高い見識があると認められる者が、専任教員として配置されていること。

【観点 5-1-5】 カリキュラムにおいて重要と位置付けた科目には、原則として専任の教授又は准教授が配置されていること。

【観点 5-1-6】 教員の採用及び昇任が、適切な規程に基づいて行われていること。

【観点 5-1-7】 教育研究上の目的に沿った教育研究活動を継続するために、次世代を担う教員の養成に努めていること。

### 【現状】

2024年5月現在、専任教員数は19名（実務家教員1名）である。1年次科目担当教員を中心とした配置で専任教員数は設置基準（30名）に未達であるが、年次ごとに配属する教員は計画的に決定しており、それらを含めると最終的に基準を満たす体制となる。1名の専任教員に対して学生数が6.3名となるため、望まれる学生数10名以内を満たしている。現在の19名の専任教員について教授、准教授、講師、助教の数と比率を表5-1に示す。

表 5-1 専任教員の数と比率

	教授	准教授	講師	助教	合計
人 数（名）	12	2	3	2	19
比 率（％）	63.2%	10.5%	15.8%	10.5%	100%

教育・研究の中心となる教授が 63.2%、准教授が 10.5%である。その他の職位は 26.3%で適切に構成されている。

専任教員については、専門分野における教育上及び研究上の優れた実績を有する者を配置すべく原則として一般公募を行い、広く有能な人材の確保を目指している。その際に助教以上の職位については、原則博士の学位を要求している。さらに臨床系薬学の教員については、臨床現場での薬剤師の経験を必須としている。

採用された教員はそれぞれの専門分野において、優れた知識・経験及び高度の技術・技能を獲得するために、常に関連する学会等での研鑽を行っている。毎年学会発表を含めた研究及び教育実績が更新されている。

専任教員の年齢構成については、定年が 65 歳のため 70 歳代はおらず、60 歳代は 21.1% であり全員教授である。50 歳代は教育・研究の中心となる教授と准教授で構成され、42.1% になる。40 歳代と 30 歳代がそれぞれ 10.5% と 26.3% であり、各職種における年齢構成の比率に著しい偏りはない。ただ女性教員が、1 名、5.3% であり、積極的に採用すべきである。

教員の採用及び昇任に関する規程として、「教育職員の職制及び任免に関する規程」が整備されている。専任教員公募の過程は、まず本学のホームページ上で必要な分野・職位を示し、さらに以下のように各職位について学位・教育経験等の要件を明記している。

(1) 教授・准教授：博士号を有する者。六年制大学（四年制大学も可）での常勤教員歴を有することが望ましい。

(2) 講師：修士号以上を有する者。六年制大学（四年制大学も可）での常勤教員歴を有することが望ましい。

(3) 助教：修士号以上を有する者。

また、資格については薬剤師免許を有する者を求め、このことにより臨床実習への対応力を重視している。さらに臨床系薬学を担当する教員については、実務経験を有することを明確に条件としている。選考過程においては、履歴書及び研究業績一覧のほか、外部資金の獲得状況ならびに教育経験の概略の提出を依頼している。また、薬学教育及び研究に対する抱負について詳細に記述した文書の提出を求めており、推薦状の提出も求めている。書類選考の後、薬学部長・薬学科長による面接を経て、「教育職員の職制及び任免に関する規程」に従い、人事委員会の審議を経て法人の役員面接に進み、法人により採用が決定される。現在のところ、選考過程における模擬講義の実施は行っていない。学内での昇格人事も優秀な人材確保の手段として行っている。専任教員として、担当する専門分野に関する教育研究上の指導能力と高い見識があると認められる者を、大学の昇格に当たっての資格要件に従い、毎年候補者を選出して法人に提出している。最終的な昇任の可否は、新規採用と同様に法人によって決定される。

教員の採用及び昇任においては、上記の規程に基づき、研究業績のみに偏ることなく、教育上の指導能力や社会貢献等を十分に吟味し、それらを反映した慎重な選考が行われている。実務教員の最新医療研鑽のための一環として、若手教員に附属病院薬剤部での薬剤師業務への参加を推奨している。この業務を行うことで、臨床的視点を

養うだけでなく、学生指導にもこの体験を活かせるなど、若手教員の成長を促していると考ええる。

#### 【基準 5-2】

教育研究上の目的に沿った教育研究活動が、適切に行われていること。

【観点 5-2-1】 教員の活動が、最近5年間における教育研究上の業績等で示され、公表されていること。

【観点 5-2-2】 研究活動を行うための環境が整備されていること。

注釈：研究環境には、研究時間の確保、研究費の配分等が含まれる。

【観点 5-2-3】 教育研究活動の向上を図るための組織的な取組みが適切に行われていること。

注釈：組織的な取組みとは、組織・体制の整備、授業評価アンケート等に基づく授業改善、ファカルティ・ディベロップメント等が含まれる。

【観点 5-2-4】 薬剤師としての実務の経験を有する専任教員が、常に新しい医療に対応するために研鑽できる体制・制度の整備に努めていること。

【観点 5-2-5】 教育研究活動の実施に必要な職員組織（教員以外の組織）が整備されていること。

#### 〔現状〕

毎年度末に全教員は、教育研究活動報告書(A、B)を大学に提出している。この際、教員には自己点検を求め、教育ポートフォリオとともに提出している。この自己点検報告書を基に学部長・学科長が業績を客観的に評価し、この評価を基に適切な教育研究活動を行うように指導することとしている。その結果すべての教員の業績が適切に記載された。学部長・学科長は全教員の教育ポートフォリオをまとめて報告書を作成するとともに、全学FDにて教員へのフィードバックを行っている。また、科研費申請前に、学部長・学科長で申請調書を添削し、競争的資金獲得を目指している。教員はそれぞれの専門の研究分野で研究成果を挙げている。研究内容は広範囲にわたり、学内はもとより他大学との共同研究や企業との共同研究も盛んである。教員の活動は教育研究上の業績等を、ホームページからリンクしたリサーチマップ上で開示しており、本開示内容は、毎年更新している。

医師及び臨床系薬学教員の一部は、リサーチアソシエイトや診療従事者(医師・薬剤師)として医療機関(大学内クリニック、大学附属病院)にて登録されており、積極的に医療現場との連携を進め、最新の医療情報の取得と教育研究へのフィードバックに努めている。

各教員に対する個人教育研究費や卒業研究を指導するための経費は教員研究費の分配を行い、予算が適正に使用されているか管理し、運用した。また、本学には毎年公募される学内研究費があるが、本学部で採択された教員は6名で総額は72万円(2024年度)となる。この研究費の採否に関しては、複数の審査委員による審査の結

果を総合的に勘案し決定される。審査の結果、毎年 8 月頃に配分額が決定されるが、一人当たり 7~50 万円となる。2024 年度の外部資金については 7 名が科学研究費を、4 名が受託研究費・研究助成金を獲得しており、さらに次年度に向けて資金獲得を目指している。教員の平均授業時間は 85 時間であり、特定の教員に負担が偏らないように、成田薬学部自己点検・評価委員会にて点検・改善に努める。本学は研究に関する統括部門として、東京赤坂キャンパスに「研究支援センター」が設置されている。このセンターの発信で、科研費を始めとする外部資金を獲得するための情報がセンターのホームページ（学内限定）上やメール等で、全研究者宛に常時提供されている。主な情報提供内容は、1) 主要な学内締切日、2-1) 研究協力センターからのお知らせ、2-2) 倫理指針改正及び臨床研究法について、3) 研究者（研究補助者）が受講すべき研修について、4) 科研費の使用・改正ガイドラインへの本学対応について、5) 科研費申請に向けて、6) 公募情報、7) セミナー・講演会・シンポジウム等のお知らせ、である。本学部教員もこれらの情報を元に研究費獲得に励んでいる。また、この「未来研究支援センター」は、科研費の調書作成に関するアドバイスや科研費の事務処理等を行う専門分野であり、本学部教員もそのシステムを利用している。

本学における教員の教育研究能力の向上を図るための活動は、全キャンパスにまたがる FD 委員会が推進している。具体的な取り組みとしては、FD 委員会が全学的な合同教員研修会を年 2 回（9 月、3 月）実施している。

研究能力の向上を図るための取り組みとしては、「国際医療福祉大学学会学術大会」を開催している。本学会は 2011 年に設立され、保健・医療・福祉の進歩、啓発、連携を目的として、他キャンパス他学部の教員たちとの意見交換の場としている。本学の査読付き「国際医療福祉大学学会誌」への論文投稿や、学術大会でのシンポジウム、口頭発表、ポスター発表などを行うことができ、研究能力向上の一助となっている。

教育上の指導能力に関しては、学生による授業評価アンケートで評価を行っている。14 項目の質問に対する回答を点数化ならびにレーダーチャート化し、前期・後期それぞれの終了時に各教員に開示される。また自由記載も添付され、これらのデータで教育指導に問題が認められる場合は、学部長・学科長から注意喚起が行われ、常に指導能力の向上が図られる。また、全キャンパスを対象として、授業評価アンケートで高い評価を受けた教員に対しては「学生が選ぶグッドティーチング賞」が授与され、表彰される。受賞者は 3 月 17 日の合同教員研修会にて口頭発表し、報告書は大学教職員にメールにて配信されている。全教員が各々の教育内容と方法を見直し、授業改善のために参考にしている。本学の授業評価アンケートは授業（講義）用、演習用、実験・実習用に分かれており、アンケートの様式は質問項目に対して選択回答する部分と自由記載する部分（意見・要望・感想など）で構成されている。なお、アンケートは本学のポータルサイト（UNIVERSAL PASSPORT）を用いている。授業評価アンケートの質問項目については、FD 委員会が定期的に内容の見直しを行っている。

本学成田キャンパスには、成田薬学部薬学科の他、医学部、成田看護学部及び成田保健医療学部を設置している。これらの学部の教育活動への対応は全学部に通じる事務

組織で一元的に行っており、事務業務の効率化を図っている。具体的には教育活動を支援する事務体制として、教務課 25 名、学生課 16 名、国際室 5 名、図書館事務職員 11 名を配置している。学籍管理、履修登録、成績管理などの全学で共通する業務は事務局教務課が担っており、各学科の教務委員と事務職員で構成され月 1 回開催される教務委員会において、情報を共有し対応している。薬学部事務室職員は、種々の問い合わせや相談への対応などの学生の支援、授業資料の印刷や出席管理などの教員サポート等の支援業務を主に担当している。どの部局の職員も毎年 4～6 回の職員研修会（SD）及び試験が実施され、常に能力の向上に努めている。

#### 〔教員組織・職員組織に対する点検・評価〕

教育研究活動の実施に必要な教員組織の編成方針を特に定めておらず、今後策定が必要と考えられる。【観点 5-1-1】基礎系教員を中心に構成し、今後、学年進行、教育課程に応じて、実務系、臨床系教員の配属が決定している。設置基準に定められた専任教員数を満たしつつ、教育研究体制を段階的に整備していく。【観点 5-1-2】教授、准教授、講師、助教の人数比率及び年齢構成は適切であったものの、女性教員が少なく、改善が必要である。【観点 5-1-2】現在の学生収容定員は 120 名である。1 名の専任教員に対して学生数が 6.3 名となるため、望まれる学生数 10 名以内を満たしている。【観点 5-1-3】専任教員については、専門分野における教育上及び研究上の優れた実績を有する者を配置すべく原則として一般公募を行い、広く有能な人材の確保を目指している。【観点 5-1-4】主要な科目については、専任の教授または准教授が適切に配置されている。【観点 5-1-5】教員の採用及び昇任においては、「教育職員の職制及び任免に関する規程」に基づき、研究業績のみに偏ることなく、教育上の指導能力や社会貢献等を十分に吟味し、それらを反映した慎重な選考が行われている。【観点 5-1-6】次世代を担う教員の養成に関しては、待遇の改善を進めるべきである。【観点 5-1-7】教員の教育研究活動は毎年度自己点検評価され、教員個人の業績はホームページ上で公開されている。【観点 5-2-1】研究活動を行うための環境は十分とは言えないものの、研究費配分、外部資金獲得、研究時間の確保、研究機器の整備等は、着実に進められている。【観点 5-2-2】教育の FD 活動は全学および学部を通じて、授業評価アンケートや研修会等が定期的実施・開催されており、教員の教育改善に役立っている。【観点 5-2-3】実務教員の最新医療研鑽のための体制は、大学病院との連携により確保されている。【観点 5-2-4】教育研究活動に必要な職員組織は、キャンパス全体を統括する事務職員組織（教務課、学生課等）に加え、学部に常在する職員を整備中である。【観点 5-2-5】

#### ＜優れた点＞

本学は医療系の総合大学であり、特に成田キャンパスには臨床系科目のすべての領域で専門教員が在籍している。



### ＜改善を要する点＞

教育研究活動の実施に必要な教員組織の編成方針を特に定めておらず、今後策定が必要と考えられる。次世代を担う教員の養成に関しては、今後待遇改善を進めるべきである。

### 〔改善計画〕

教育研究活動の実施に必要な教員組織の編成方針を特に定めておらず、今後策定が必要と考えられる。薬学教育モデル・コア・カリキュラム（令和４年度改訂版）に対応した教育面の充実を目指した FD、SD 活動を推進する。

## 6 学生の支援

### 【基準 6-1】

修学支援体制が適切に整備されていること。

【観点 6-1-1】 学習・生活相談の体制が整備されていること。

【観点 6-1-2】 学生が主体的に進路を選択できるよう、必要な支援体制が整備されていること。

注釈：「支援体制」には、進路選択に関する支援組織や委員会の設置、就職相談会の開催等を含む。

【観点 6-1-3】 学生の意見を教育や学生生活に反映するための体制が整備されていること。

注釈：「反映するための体制」には、学生の意見を収集するための組織や委員会の設置、アンケート調査の実施等を含む。

【観点 6-1-4】 学生が安全かつ安心して学習に専念するための体制が整備されていること。

注釈：「学習に専念するための体制」には、実験・実習及び卒業研究等に必要な安全教育、各種保険（傷害保険、損害賠償保険等）に関する情報の収集・管理と学生に対する加入の指導、事故・災害の発生時や被害防止のためのマニュアルの整備と講習会の開催、学生及び教職員への周知、健康診断、予防接種等を含む。

### 〔現状〕

本学では、学生の学習および生活支援を目的に「チューター制度」を導入している。1年次の学生からチューター教員1名を約10名の学生に対して配置し、さらに各学年には学年主任および副主任を配置し、学習・生活・就職に関する相談や合理的配慮を必要とする学生からの申し出に随時対応している。

本学には「学生相談室」が設置されており、臨床心理士が火水金曜日に常駐している。学業・生活・対人関係・メンタルヘルスに関する相談に対応し、必要に応じて適切な専門機関と連携することで、学生が安心して大学生活を送れる環境を整えている。

学生の健康管理の一環として、毎年春には健康診断を実施し、学生の健康状態を把握するとともに、必要な場合は適切な指導を行っている。

実験実習科目（「基礎薬学実習」）については、事故防止の観点から専任教員7名で対応した。また、学生への安全教育については、実習書に明記するとともに必ず実習前講義で注意喚起を行っている。

学生生活支援に関する意見の収集は、学生課および学生委員会が全学を対象に実施している。また、2024年度は、本学部で独自に4月の新入生学生状況調査を実施した。このアンケートでは、当大学を知ったきっかけ、出身高校、居住地、通学方法、学生生活などに関する質問に加えて、自由意見も記載できる形式としている。

授業に関する学生の意見収集のため、教務課ではほぼすべての講義・実習に対し「授業評価アンケート」を実施しており、結果は集計後、各担当教員へ送付している。

本キャンパスには防災・エネルギー対策委員会を設置し、組織的かつ効率的な防災対策を実施している。

#### **[学生の支援に対する点検・評価]**

チューター制度により、学習・生活・心理面の多角的支援体制が整備されている。加えて、ハラスメント対策として、学生生活の手引きにて具体的な定義や事例を示し、学生相談窓口の教職員を明示することで、相談しやすい体制を整えている。【観点 6-1-1】

様々な講義を通して1年次から早期の就職への意識づけを行っている。【観点 6-1-2】

授業評価アンケートはほぼ全講義・実習において実施され、担当教員にフィードバックされている。オフィスアワーの設定も義務付けられ、学生が意見を伝えやすい環境が確保されている。【観点 6-1-3】

学生の健康管理の一環として、毎年春に健康診断を実施し、必要に応じて指導を行っている。【観点 6-1-4】

#### **<優れた点>**

本学では、チューター制度、学生相談室を通じて、学習・生活・心理面の相談体制が整備されている。特に、臨床心理士の常駐により、学生が心理的なサポートを受けやすい環境が確立されている。

#### **<改善を要する点>**

大学内で孤立する学生は生活習慣も悪く学業不振となる場合が多いと思われる。孤立する学生を減らすために様々な学生と交流する場を設ける必要がある。

#### **[改善計画]**

大学内で孤立する学生を減らすために、同学年でのグループだけではなく、学年を超えたグループを作成し、様々な学生が交流し共に学ぶ場を設ける予定である。

## 7 施設・設備

### 【基準 7-1】

教育研究上の目的に沿った教育研究活動の実施に必要な施設・設備が整備されていること。

### 〔現状〕

1、2年次に講義と実習を行う公津の杜校舎には、WA棟9階に講義室として定員162名(216.0 m<sup>2</sup>)規模の教室が2つ(WA910、WA911)が設けられている。WA911室は可動式机でありグループワークやチーム基盤型学習に適した仕様となっている。これらの講義室には、講義用AVシステムが整備されており、講義、演習等の運営に支障はない。また、同じフロアの定員12名(45.1 m<sup>2</sup>)規模の会議室2つを学生の自習室として開放している。基礎薬学、化学系および物理系の実験実習用として、WA棟9階にドラフトチャンバー4基が設置された定員144名(360 m<sup>2</sup>)の実験室が整備されている。この実験室には各実習に必要なガラス器具類が実習毎に分類・整理されている。加えてエバポレーター18台、恒温乾燥機4台、微量分光光度計4台、電子天秤8台、マイクシステム1セットも設置されている。この実験室は、許容電気容量の上限が低いため、電気容量を大量に使用する化学系実習では現状、運用に工夫が必要である。各実習の準備を行うための化学系準備室(72 m<sup>2</sup>)と物理系準備室(72 m<sup>2</sup>)が併設されている。化学系実験準備室はドラフトチャンバー1基、エバポレーターとその周辺機器2セット、凍結乾燥機とその周辺機器1セット、精密天秤1台、高速液体クロマトグラフィー1台がある。物理系実験準備室には、ドラフトチャンバー1基、精密天秤1台、製氷機1台がある。分析機器は、学習機器室(72 m<sup>2</sup>)に集約されており、赤外分析装置2台、紫外可視分光光度計2台、高速液体クロマトグラフィー1台、分光蛍光光度計2台、熱示差計2台、精密天秤1台、純水製造装置2台がある。これらの部屋の許容電気容量も上限が低いため、実際の運用には工夫が必要である。この様に、許容電気容量の上限が低いことを改善するため、大学の施設管理部署と連携して、電源増設工事に向けての協議を行っている。生物系の実験室(72 m<sup>2</sup>)2部屋およびNMR室(72 m<sup>2</sup>)はWA棟8階の基礎医学研究センター内にある。生物系実験室には実験を遂行するために必要な機器・器具が整備されており、細胞培養実験や遺伝子組換え実験等が実施可能な状態である。NMR室にはBrucker製400 MHz NMR(AVANCE series)が1台設置されている。WA棟7階には、動物実験センター(369 m<sup>2</sup>)が設置されており、動物を用いた実験等に使用されている。

図書館はE棟1階に看護、保健福祉、薬学に関連した書籍と雑誌を収蔵する成田キャンパス図書館が、WA棟3階に医学系の書籍・雑誌を収蔵する医学図書館がそれぞれ設置されている。雑誌については、電子ジャーナルとして Science Direct、Springer Link、Wiley Online Library、American Chemical Society、New England Journal of Medicine、メディカル オンライン、医書など約15,900種(アーカイブを含む)を購

入しているほか、各種データベース（医中誌 Web、SciFinder、Cochrane Library、今日の診療 WEB、Journal Citation Reports 等）も利用可能である。電子ジャーナル及び電子書籍は、IUHW INFO NAVI で検索可能で、リモートアクセスサービス「e リソースコネクト」により学外からのアクセスも可能となっている。薬学関連の書籍は、新設であるため少ないが、シラバス掲載図書はすべて購入対象とされている。加えて、学生からの要望（随時）及び教員からの推薦（年 2 回）を取り入れて、図書委員会で検討の上、購入する書籍を選定し蔵書の充実に努めている。開館時間は授業日は 8:30-21:30、土曜日と夏季・春季の長期休暇期間は 8:00-17:00 である（国際医療福祉大学図書館のホームページ：<https://www.iuhw.ac.jp/library/>、国際医療福祉大学成田キャンパス図書館ホームページ：<https://opac.iuhw.ac.jp/Narita/opac/Top>）。

ネットワーク環境は Wi-Fi 接続と有線 LAN 接続が可能である。学生は Wi-Fi によるインターネット接続により、講義資料等を電子媒体として閲覧しながら授業を受けることが可能である。有線 LAN は主として大学から各教員に支給された PC と、大学施設に設置された PC に対して使用されている。教育研究に使用する機器の増設や更新およびネットワーク環境の改善等については、不定期で開催される全学の成田教育研究機器整備検討委員会で審議され、教育環境の維持に努めている。

3 年次以降の授業が行われる畑ヶ田校舎〔校地（薬草園含む）：10,145 m<sup>2</sup>、校舎：8,297 m<sup>2</sup>〕（2026 年 3 月完成予定）は現在建設中である。本校舎の設計には、鶴沢建設一級建築事務所および千都建築設計事務所指導の下、本学部教員が中心となり、医学部、国際医療福祉大学成田病院関係者、国際医療福祉大学法人の関係者が携わった。校舎は 6 階建てで、1 階から 5 階までは主に本学部の講義と実習に、6 階は医学部との共同実験スペースとして活用することを想定している。加えて、薬草園（200 m<sup>2</sup> 以上）を併設予定である。1 階は 147 席の講義室 2 部屋（203 m<sup>2</sup>）、48 席の学生ラウンジ 1 部屋（89 m<sup>2</sup>）、男子更衣室 1 部屋（54 m<sup>2</sup>）、女子更衣室 1 部屋（93.5 m<sup>2</sup>）、事務室（131 m<sup>2</sup>）を設置予定である。2 階は 147 席の講義室 2 部屋（203 m<sup>2</sup>）、42 席の講義室 4 部屋（67.8 m<sup>2</sup>、この 4 部屋は可動式間仕切りで仕切られており、仕切りを取り払うと 168 席以上、271.2 m<sup>2</sup>の講義室としても使用可能）、204 席のラウンジ 1 部屋（342 m<sup>2</sup>）を設置予定である。3 階は実習及び生物系、物理系実験室として使用する。144 席の実習室 1 部屋（324 m<sup>2</sup>）、生物・微生物系研究室 1 部屋（139 m<sup>2</sup>）、共同培養室 1 部屋（67.8 m<sup>2</sup>）、衛生系研究室 1 部屋（139 m<sup>2</sup>）、低温倉庫（67.8 m<sup>2</sup>）、薬理・生理系研究室 1 部屋（139 m<sup>2</sup>）、物理・薬剤研究室 1 部屋（67.8 m<sup>2</sup>）を設置予定である。4 階は実習室、実務系、物理・薬剤系実験室として使用する。実務経研究室 1 部屋（139 m<sup>2</sup>）、服薬指導・フィジカル室（135.6 m<sup>2</sup>）、DI 室（135.6 m<sup>2</sup>）（服薬指導・フィジカル室と DI 室は間仕切りで仕切られているが、仕切りを外すと 271.2 m<sup>2</sup>の実習室として使用可能）、注射剤・無菌・調剤室 1 部屋（139 m<sup>2</sup>）、軟膏・水剤・散剤・計数調剤・監査室 1 部屋（135.6 m<sup>2</sup>）、社会・薬学研究室 1 部屋（135.6 m<sup>2</sup>）、物理・薬剤研究室 1 部屋（67.8 m<sup>2</sup>）、中央機器室（67.8 m<sup>2</sup>）を設置予定である。5 階は動物実験室と教員の居室、会議室として使用する。動物実験室 1 ゾーン（459.8 m<sup>2</sup>）には実験室 4 部屋、飼育室 5 部屋等を設置予定である。

さらに、教員個室は 12 部屋(各 33.9 m<sup>2</sup>)、学部長室 1 部屋(64.2 m<sup>2</sup>)、会議室 1 部屋(67.8 m<sup>2</sup>)、講師・助教教員室 1 部屋(67.8 m<sup>2</sup>)等を設置予定である。6 階は共同実験室として医学部や大学病院関係者との共同研究に使用するため、実験室 2 部屋(421 m<sup>2</sup>)、測定機器室 2 部屋(67.8 m<sup>2</sup>)、培養室 1 部屋(67.8 m<sup>2</sup>)を設置予定である。上述の各講義室と実験室に必要な什器・機器、実験に必要な実験台や機器類も担当業者と協議して、設置予定である。ネットワークに関しては公津の杜校舎と同等の環境を構築する予定である。

#### [施設・設備に対する点検・評価]

1、2 学年が講義・実習を行う公津の杜校舎については、講義室・実習室は整備されている。現在、大学がペーパーレス化を推進していることに伴い、講義資料を電子化し、講義中に PC、タブレット、スマートフォンなどの電子機器で閲覧することを学生に推奨している。しかし、可動式机がある WA911 講義室にはコンセントが少なく、講義中に電子機器類のバッテリーが切れると、充電ができないという問題がある。そのため、現状は講義数の少ない 1 年生が WA911 講義室で講義を行うという対策を取っている。

実習室、化学系実験準備室、物理系実験準備室、学習機器室については、電気容量の上限が非常に低く、化学系実験で加熱装置、エバポレーターを同時に使用すると、ブレーカーが落ちるという事象が頻発している。早急に電源増設が必要である。

3 年次以降に使用する畑ヶ田校舎は現在建築中で、2026 年度 3 月竣工予定である。公津の杜校舎の電源問題を受けて、各講義室、実習室、実験室には十分な電気容量を確保できるように設計の段階から努めている。加えて、実習に必要な実験器具や什器の選定も入念に行っている。

#### <優れた点>

公津の杜校舎は、本学部の講義室、実習室が同じフロアー（WA9 階）にあり、短い休憩時間内に講義室や実習室を移動することが可能である。同一フロアーにある共同研究室には、常時 2～3 名の教員が在籍しており、学生からの質問などに素早く対処可能である。

#### <改善を要する点>

講義室、実習室ともに電気容量の増設が必要である。研究遂行に必要な機器類も不十分である。また、女子学生が多いにもかかわらず、同一フロアーには女子トイレが 2 箇所しかない。そのため、短い休憩時間で階をまたいで女子トイレを使用する事も多い。このことから、使用できる女子トイレの数を増設する必要がある。

#### 〔改善計画〕

公津の杜校舎の講義室、実習室、化学系実験準備室、物理系実験準備室、学習機器室の電気容量増設工事を 2025 年度中に行い、実習に支障をきたさないようにする。現在、増設する電気容量は算定済みで、工事業者を選定中である。研究遂行に必要な分析機器類を導入し、より良い研究環境を構築していく。

女子トイレの増設については、大学の施設管理部署との協議を行うことで改善に努める。

## 8 社会連携・社会貢献

### 【基準 8-1】

教育研究活動を通じて、社会と連携し、社会に貢献していること。

【観点 8-1-1】 医療・薬学の発展及び薬剤師の資質・能力の向上に貢献していること。

注釈：地域の薬剤師会・病院薬剤師会・医師会等の関係団体、製薬企業等の産業界及び行政機関との連携、生涯学習プログラムの提供等を含む。

【観点 8-1-2】 地域における保健衛生の保持・向上に貢献していること。

注釈：地域住民に対する公開講座の開催、健康イベントの支援活動等を含む。

【観点 8-1-3】 医療及び薬学における国際交流の活性化に努めていること。

注釈：英文によるホームページの作成、大学間協定、留学生の受入、教職員・学生の海外研修等を含む。

### 〔現状〕

薬剤師会および地域の薬局、病院薬剤部との関係構築を重視し、設立準備段階から千葉県・地域・職域の薬剤師会に対して、学部の教育理念や人材育成方針を説明し、意見交換を重ねることで相互理解の深化に努めてきた。2024年度は、各種会議へ積極的に参加し、薬剤師会の協力を得ながら導入教育の体制を整備した。あわせて医療現場から得られたニーズを教員間で共有し、学生指導に反映する仕組みを整備した。さらに薬剤師業務の多様性に対する理解を促すため、導入教育で病院と行政（県健康福祉部）の担当者による講義を実施した。

教員が厚生労働省および医薬品医療機器総合機構（PMDA）での専門家会議に参画し、技術指針の策定を通して、医薬品開発と適切な使用の促進に貢献した。【観点 8-1-1】

地域における保健衛生の保持・向上を目的とした大学の特別公開講座として、漢方製剤分野における主要製薬企業の代表取締役役に漢方・生薬を通じた健康への貢献について講演をいただいた。また教員による風邪の漢方薬についての公開講座、および小・中学生対象のキッズスクールでの生薬紹介を行った。高等学校からの要請を受けて複数の模擬講義、模擬実習を各学校と成田キャンパスで実施し、医薬品の適切な活用への理解を促進した。【観点 8-1-2】

国際交流の活性化として留学生を受け入れるとともに、全学の2年生を対象とした海外施設での「海外保健福祉事情」研修に教員が参加し、研修先の教職員と指導を行うとともに、次年度以降の成田薬学部からの学生参加に向けた準備を進めた。【観点 8-1-3】

### 〔社会連携・社会貢献に対する点検・評価〕

多様な場で活躍できる医療人の養成を目指し、教員間での情報共有を重視するとともに、学部外からの協力も得ながら、開設年度に生じた様々な課題に対して一定の活



動水準を確保することができた。今後は、学生の進級に伴って、社会との連携に関する活動の一層の多様化推進が期待される。主な達成点および課題を以下に示す。

#### ＜優れた点＞

1. 複数の薬学部がある千葉県内での新設薬学部として、附属病院と連携した医療重視の教育方針に対する評価と、関係者の協力を得ながら体制を整えることができた。
2. 大学のシステムを活用し、公開講座等を早期から効率的に実施することができた。
3. 生薬に関する講座は幅広い年齢層の参加を得て好評を博した。

#### ＜改善を要する点＞

1. 学部 1 年目の学生が順次進級するのに伴い、実務実習や地域連携活動が本格化する。地域の薬剤師会に卒業生のネットワークが未形成な中で必要な教育体制や支援体制を段階的に整備していくため、さらなる協力関係の強化が求められる。
2. 公開講座を継続的に実施するため、薬学部教員の多様な専門分野を活用するとともに、参加者の関心を把握し、対応可能な領域を拡充していくことが今後の課題となる。

#### 〔改善計画〕

1. 薬剤師会の活動等へ教員が継続的かつ主体的に関与し、協力関係を強化していく。
2. 県内の医薬品メーカーの協力を得て講義等を行い、医薬品の開発・製造や関連する薬剤師の業務に対する理解を促進する。
3. 大学が主催する公開講座に加え、自治体等が企画する事業にも積極的に取り組み、多様な要望に応えられるようにする。
4. 成田薬学部の 2 年生が夏季・冬期に分かれて「海外保健福祉事業」に参加することで、薬剤師の国際的な役割を知り、自らの将来像を多角的に考える機会とする。